

琉球大学学術リポジトリ

琉球文化圏にのこる古刺繍の調査報告—本部町嘉津 宇の仲村家伝世品を中心に—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2011-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片岡, 淳, 植木, ちか子, 寺田, 貴子, Kataoka, Jun, Ueki, Chikako, Terada, Takako メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/22269

琉球文化圏にのこる古刺繍の調査報告

——本部町嘉津宇の仲村家伝世品を中心に——

片岡 淳・植木ちか子・寺田貴子

The Okinawa Embroidery Costume and Textiles, a square silk cover or table clothes
and headband in the Ryukyu islands.

14th Century Embroidery Techniques, The Nakamura family Collection
in Katsuu, Motobu, Okinawa.

Jun Kataoka*, Chikako Ueki** and Takako Terada***

はじめに

琉球文化圏とは、かつて琉球国と呼ばれた今の先島諸島から沖縄本島とその周辺諸島および奄美大島を含む琉球文化の及ぼした広範囲の地域を呼称している。ここで琉球時代と称する時期を、およそ13～17世紀初頭ころまでと設定して以下論じる。

琉球時代の服飾用語に「御衣」と記し(みそ)あるいは(んす・むす)と称した服飾用語が古謡の歌詞や『おもろさうし』に散見できるが、現今の沖縄ではこの「御衣」を「大袖衣」(うふすでちん)と呼称している。この琉球文化圏の本部町嘉津宇、伊是名島、沖永良部島および久米島にのこる古刺繍の御衣で、三領の大袖衣資料の研究を主に論じる。その他に中国服飾の補服に模倣考案されたと考えられる刺繍補子を大袖衣に付け飾った「あしあげこむね」に用いられた古刺繍やその他の小刺繍裂の資料^(註1)についても紹介し言及する。(植木)

嘉津宇の仲村家に伝世する大袖衣についての先

行調査は『国際服飾学会誌 3号』^(註1) p38-42に報告され、その刺繍技術は室町時代の平繍としてしている。本研究は復元作業と再調査をしたことで、琉球独特の琉球千鳥繡いと綾織り繡いがあることがわかった(寺田)。また衿の一部が欠損しているが、復元作業でその部分の模様在意匠がほぼ推測できた。形態については広袖・広衿・身頃がゆったりとした琉球服装の特徴は、すでにできていたことがわかった(植木)。仲村家伝世の刺繍大袖衣の生地は、従来魚子織といわれる二本引き揃えの平織絹織物とされていたが、今回締切緋(しめきりかすり)という意匠の織り方であることがわかった(片岡)。

仲村家の来歴と伝世品

沖縄本島北部の国頭郡本部町嘉津宇の集落は、山や丘に囲まれた閑静でこぢんまりとした趣の台地に在り、東部は今帰仁村と接し、今帰仁城にも近い。今帰仁城はかつて北山城あるいは山北城と称した。

嘉津宇は、地元ではカッチューと呼称していて、

* 琉球大学教育学部美術教育教室教授

** 国際服飾学会元理事

*** 活水女子大学健康生活学部教授

北に字具志堅、北西に字北里、北西に字謝花、南に字古島、東南には字大堂と接し、それはいずれも山または丘によって分かれ、とりわけ東側の今帰仁城とは遮断された地形で実に深い緑に抱かれた集落と『沖繩国頭の村落』^(註2) 嘉津宇(かつう)の項に紹介されている。

第二次世界大戦前の仲村家は仲村渠(なかなだかり)姓で、戦後に「仲村」と改姓された。屋号をユレーヤ(集会所)と称して、嘉津宇集落の中心地に在し、およそ四百坪もの広い屋敷は、太い福木に囲まれた古風な雰囲気屋敷構えである。この仲村家は門中の元祖家で、先祖は具志堅ムラから来たとも伝えられている。

ここ字嘉津宇の旧家は、上原門中のウプヤー(大屋)と仲村門中のユレーヤの両家とされる。往古は、この仲村家に集落の人々が集い合をもったので、屋号をユレーヤと呼んだらしいと前戸主の故仲村トシさんは語る。

仲村家屋敷前の道は集落の東西に延びるメインストリートであり、また屋敷の西隣り背後の奥には部落拝所のウガンと称する御嶽で、その登り口の前方にウルンという拝所とアサギ(神あしやげ)が併在する。アサギの西隣りにウプヤーの上原家が在し、聖域前の道向こうには嘉津宇公民館がある。

かつての嘉津宇ムラは、字伊豆味の小字である古嘉津宇に在って、そこから現在地に移住し、具志堅ムラとの併合や分離を経て今日に至った。その古嘉津宇から移住してきたのは上原門中であつたという。

故仲村トシさんからの聞き取りでは、ある時代に仲村家の先達が、北山城の高貴な落人を匿ったという云い伝えがあり、戦前は家の一番座(上座)に祭壇をしつらえて、按司位牌二基と古櫃を祀っていたという。戦後は、屋敷の東角に別棟のカミヤーと称する拝所を建て、そこの祭壇は今帰仁城に向け作られていて、古風な中国式位牌の俗称ガーナイフェーの按司位牌二基を祀っている。仲村門中の人々は、旧暦の八月十日には参集してそこへ詣でて、その位牌を崇め祀る。この按司位牌二基のつくりは、庶民や百姓のものとは異なつたつくりである。筆者(植木)は過日、隣りの具志堅集落の某旧百姓家の古位牌を見分したが、仲村家

の按司位牌の形やつくりとは全く異なっていた。1985年前後、筆者(植木)は度々仲村家の祭祀信奉を實見したが、その祭祀はノロや根神神女の祭礼とは異なり、あくまでも門中の宰領、ここ仲村家の戸主、あるいは近縁の篤志家によって祭礼は執り行われている。

この仲村門中は、第一尚王系統の北山監守係や第二尚王系統を崇拝することなく、昨今まで浦添のゆうどれ・英祖王墓に詣で、そして首里儀保在の屋号をナーデーラと呼称する仲宗根家の祖先位牌を信奉している。そのナーデーラ仲宗根家は、中昔北山城の王族と由緒ある今帰仁村湧川の旧家・新里家(屋)とも祖先信奉の旧交が続いているという。

仲村門中は屋部のアジミチ屋へも戦前戦後とも詣でていたと故仲村トシさんは語る。並里の上之殿内の上代系譜の野史によるとこのアジミチ屋の先祖は、英祖王系の五代目仲昔今帰仁城主丘春按司の長男の六代目仲宗根若按司の長男・今帰仁子なまじんしとされ、次男・今帰仁子は満名ムラ上之殿内の元祖と民間由来記に伝えられている。また、『屋部久護家文書』の「今帰仁城主系由来記」には「…今帰仁伯尼芝が兵をひきいて襲った(筆者(植木)注・1322年カ)ので中昔今帰仁城主は、親兄弟妻子を共に引き連れて敗走し、具志堅ムラに身を隠した。親はそこで死んだので埋葬した…」などとみえ、口碑や伝説を勘案すると、六代目仲宗根若按司の長男・今帰仁子は、屋部のアジミチ屋の元祖、次男・今帰仁子は、満名ムラ上之殿内の元祖とするならば、具志堅で死亡した親とは敗走の元今帰仁城主(北山世主今帰仁按司であろうか)で、その子息が時を経た後日にそこでみまかつたかで、それら城主と子息かの位牌が仲村家の按司位牌二基なのであろうか。仲村家では永年の間それが秘伝されたあまり、いつのまにか史実や人物名は忘れ去られて、「按司位牌」とのみ記憶され、祭祀行事が継承された。

ともあれ、この仲村家にはそれら位牌と共に秘蔵伝世されている品に、1234年の中国の貨幣・瑞平通宝一枚や、古刺繍の御衣や俗称古渡りいちご紋織のみさじなどがあり、その出自の確証を得ることはできないが、島袋源一郎氏が「大正六(1917)年に編纂された『沖繩縣国頭郡志』の旧

家由緒に次の記述がある。

◎本部村並里（元満名）屋号上の殿内一名満名富家

右並里家は当地方に於ける旧家にして今帰仁本部及び県下各地方より神拝みと称し巡礼する者甚だ多し。同家上座敷の左隅に御柵あり按司位牌三個を祀り霊前古櫃の中には古刀三振（大一本二尺七寸、小二本一尺五寸）

衣類式枚（一は絹地一は更紗）縹子の古帯一筋、羽二重の襦袢一枚とを秘蔵せり同家の伝説に依れば中昔北山城主滅亡に際し王族の隠遁せるものなりといふ然れども父祖以来数百年間の由緒甚だ秘密に附せられしを以て記録と口碑の正確なるものなきを憾とす。又口碑に曰く同家は元今帰仁城下にありて代々今帰仁ノロクモイの神職を継承せしが後本部に移居するに及び現今帰仁ノロ家に之を譲りたりと、其由緒の秘密裡に葬られしは北山落城後その仇敵今帰仁城主たりしに依るにあらざるか、

◎ 本部村嘉津宇仲村渠氏、屋号ユレ屋（同家永年村屋なりしを以て此名あり）同家にも前記並里家の如く上座に按司位牌二個を祀り霊前床上に古櫃一個ありて左の遺物を納めたり。

- 一、絹の琉服一着（水色の七子地に花模様の古代刺繍あり）
- 一、八巻用サージ二筋（金欄にして梅花の小紋模様あり長各一尋）
- 一、布片二種（水色絹地及黄色絹地に孔雀、鳳凰等の巧妙なる古代刺繍あり）

同家の口碑に依れば阿庇理恵按司の礼服なりしといふ。又北山滅亡の際貴族此家に隠遁して世を避けたりとも伝ふ。然るに右遺物の保存せらるゝ外何等の記録なく従つて其人物の当家との関係及墳墓等全く不明にして五里霧中に葬らるゝのみ。

この満名並里の上之殿内に秘蔵されていたという「古刀三振」や「縹子の古帯一筋」というのは、男性用であつて女性の衣裳とは思えない。その上之殿内にも「按司位牌」が祀られている。上之殿

内の古衣裳やその他は戦時中に失逸し現存せず、仲村家伝世の御衣との比較検証のすべは無い。

また、『沖縄縣国頭郡志』には仲村家伝世品は、阿庇理屋恵按司（オーレー）神女の礼服…とあるが、若しオーレー神女と関係ありとするならば、オーレー祭祀や神女神具のタマや神女衣裳らしい痕跡でもあろう筈である。御衣の古刺繍のモチーフは、御衣全体に大らかな州浜やいろいろな花柄をつる草でつなぎ配したもので、神女の神格を表すモチーフとは思えない。それに仲村家は、オーレー神女の祭祀信奉は全くみられず、オーレー神女のそれらなどは別の某家に伝存されていて、今でもそちらではオーレー神女の神事信奉が行なわれている。沖縄の神女祭祀は、それなりの祭祀信奉を継承されるのが規範となっている。

これらの事象から、筆者（植木）の1986年の調査報告書『国際服飾学会誌第3号』「琉球にのこる染と繡」に於いて、仲村家とオーレー神女の関係について述べたが、その後の研究によって全く関係の無いことと筆者（植木）は考察し、ここに訂正する。

なお、1983年6月に筆者・植木ちか子が予備調査で仲村家を初めて訪れた時は、袖・身頃・衿・衿などはバラバラに解き放たれていた。そこで筆者（植木）は、時折仲村家に参上して、それらを縫代に添って縫い整えると現状の大袖衣になった。そのような状況での大袖衣の採寸された寸法については、長年の布の劣化もあり、数値の変動はいなめない。

表1 仲村家伝世古刺繍大袖衣の寸法（単位cm）

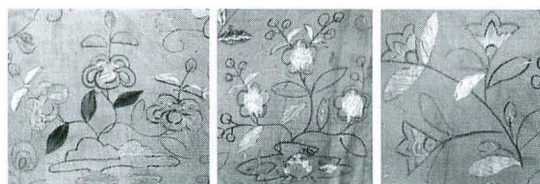
袖口	71.0	衿肩あき	8.0
袖付	71.0	衿下がり左	12.5
		右	13.0
袖丈	71.0	衿幅	30.0
袖幅	46.0	合袂幅	30.0
身丈	150.0	衿下	25.0
肩幅	46.0	衿幅	14.0
後幅	46.0	布幅	48.0
前幅	45.0		

以上文責：植木



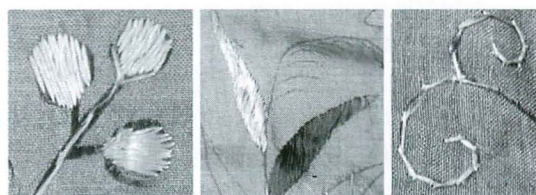
嘉津宇 仲村家伝世「刺繡大袖衣」背面 写真1 撮影/寺田貴子

<文様> (一例)



州浜文、植物文

<技法> (一例)



たて繡いきり
葉脈かけ

斜め繡いきり
押さえ繡い

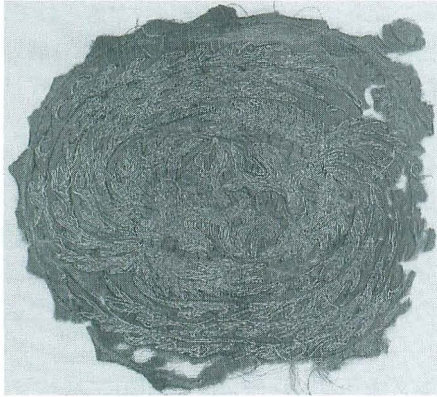
まつい繡い
しべかけ

一領の植物文様の総刺繡の大袖衣である。仲村家がこれを所有する経緯や時代についての伝承や記録、衣装の形態などはすでに植木氏らによって調査されており、「衣装は男用カ」と推察されている。衿肩周りと右衽下部に欠損があるものの、ほぼ完全な状態であり、衣装全面に施された刺繡は日本刺繡の技法と同様である。

本資料は、前田育徳会が所蔵する「絹紬地花文尽裂」と文様、繡い技法、色彩ともに類似している。

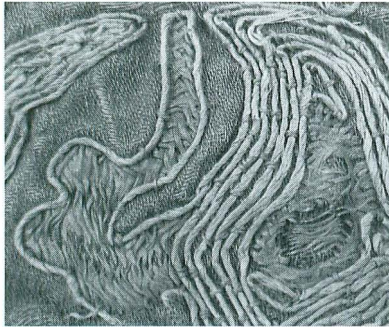
前田家資料には州浜文様が無く、文様がやや小さい、繡いが丁寧であるなどの相違点が認められる。

嘉津宇 仲村家伝世
「鳳凰文様刺繍裂残欠」〈現状〉



全体 (25×20cm) 撮影／寺田貴子 写真2

文様と刺繍技法



鳳凰文・片駒取り 写真3



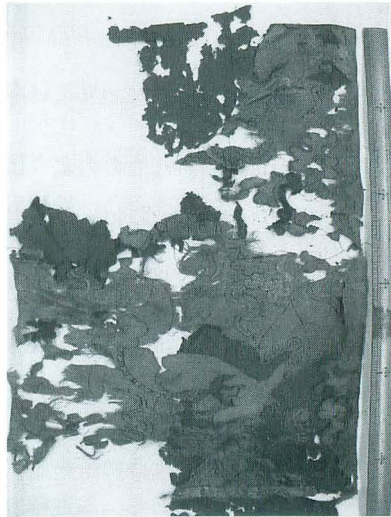
雲文・琉球千鳥繡い 写真4

向かい合う一対の鳳凰を中心に、雲が周りに配置された文様で、下絵は墨線で明瞭に描かれている。基布は絹と思われる縞子地で、色は「鶯茶」よりもくすんだ色である。鳳凰文様には「亜麻色」の糸で片駒取りが施された部分と、頭部や胴の一部分には絹であろう「生壁色」の、撚りをかけないままの平（釜）糸で「琉球千鳥繡い」によって刺繍された部分がある。

鎖繡・まつい繡・平繡・押さえ繡などが部分的に用いられている。駒糸には、微小な金色の薄片が付着している部分が目視でも観察できたことから、本来は金糸であろうと推察する。片駒取りは緻密な平埋めではなく、「チャラ繡い」のように透き間があり、羽根先など鋭角部分の「角付け」処理も緩やかである。駒糸を押さえるとじ糸には「生壁色」の撚り糸が用いられている。

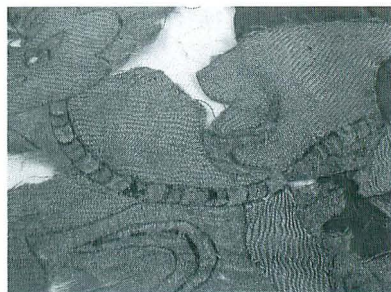
文様外周の雲や三角形を連続させた部分は「生壁色」と「千草鼠」の2色の平糸によって「琉球千鳥繡い」が施されており、その糸の重なりは一定ではなく、三本あるいはそれ以上の重なりを持つ部分も確認できた。資料の裏面には、木綿と思われる平織の赤い布地の断片が数片(大きいもので約2×2cm)、部分的に付着している。

仲村家伝世「カイチ様文様刺繍裂残欠」〈現状〉



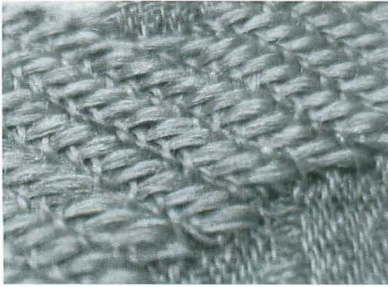
全体 (55×40cm) 撮影／寺田貴子 写真5

文様と刺繍技法



カイチ様文様・琉球千鳥繡い(腹部) 写真6

文様と刺繍技法



本綾織り繡い（部分拡大）写真7

刺繍の特徴

欠損箇所が多いものの、文様には正義や公平を象徴する瑞獣の獬豸（カイチ）かと思われる四本足の動物と雲が確認できる。下絵は墨線で明瞭に描かれており、基布は絹と思われるくすんだ「老緑」色の縹子地で、裏には木綿と思われる赤い平織の布が付着する。

カイチのような動物文様は、一見、日本刺繍の「切りばめ」や欧風刺繍の「アップリケ」のような、他の裂が縫い付けられたもののように見えるが、文様の輪郭部分を注視すると、織物組織のように刺繍で表現する「織り繡い」の一種の「綾織り繡い」である。しかし、日本刺繍の「綾織り繡い」のような、目飛ばし菅繡いをして、斜めに糸をかけた後、二度目の菅繡いをし、その菅糸のみをとじる技法とは異なり、欧風刺繍の「表面ぬい」の一種である「サーフェイス・サテン・ステッチ」のような、表面は縹子目のように糸を並べ、裏側には糸渡りをしない技法である。本資料の「綾織り繡い」の綾線は右上がりとながりの両方があり、文様の向きによって自由に変化している。また、経糸にはすべて撚り糸が用いられているが、横糸には平糸のものとながりが掛ったもの両方がある。

本資料に観察される「綾織り繡い」については、日本刺繍の繡い表現である「綾織り繡い」とは異なって、刺繍面内に「とじ押さえ」がないことから、筆者（寺田）は「本綾織り繡い」と称している。

カイチ様の動物文様には「路考茶」色の糸で

「本綾織り繡い」が施され、胸から腹部にかけての帯状の横縞文様には「路考茶」と「鉄色」の2色の糸で交互に「琉球千鳥繡い」が施されている。資料全体に配された雲文様は「本綾織り繡い」と「琉球千鳥繡い」で、「路考茶」、「カーキ」、「納戸鼠」の3色の糸それぞれで表現されている。雲に施された「本綾織り繡い」の経糸にはすべて撚り糸が用いられているが、横糸には平糸のものとながりが掛ったものとの両方があり、「琉球千鳥繡い」の部分はすべて平糸で、二本や三本あるいはそれ以上の糸の重なりを持つ繡い表現も確認できる。

鳳凰文様とカイチ様文様の刺繍について、両資料共通に「千鳥縫い」の技法に似るものの、交差する糸が数本以上ある繡い表現が認められ、動物文様裂には「綾織り繡い」に似るものの「とじ押さえ」が施されていない繡い表現が観察される。

「千鳥縫い」様の技法は、後述する沖縄県伊是名村の名嘉家に伝わる刺繍大袖衣の刺繍技法と同一で、目視観察では縹子地の基布や刺繍糸の材質および色調もほぼ類似している。

琉球の刺繍品に関する歴史的な記録や刺繍用具などの遺物が見つかっていない現時点で、刺繍の表現技法のみで系譜を考証することはできないが、筆者（寺田）は、本資料2種の刺繍裂と名嘉家の大袖衣とは、あまり隔たっていない時期に、ほぼ同じ流派の繡師などによって製作されたのではないかと推測する。

また、琉球王府から下賜された装具や琉服、伝統的な神事などに使用されてきた布帛類に施された刺繍、およびこれまでの調査で観察された個人所蔵の伝世刺繍品など、琉球文化圏に特徴的に伝わる刺繍については「琉球古刺繍」と称し、伝統的な日本刺繍には名称が見当たらない「千鳥縫い」様の技法を「琉球千鳥繡い」、「とじ押さえ」が施されない「綾織り繡い」様の技法を「本綾織り繡い」と称することを提案してきた。

「琉球千鳥繡い」が多用されている要因には、裏に糸を渡らせないことによる刺繍糸の節約、刺

繡時間の短縮、刺繍品の軽量化などのほか、王の装束との区別や、中国や日本との間における琉球の格（位置、序列）からの制限、あるいは、その

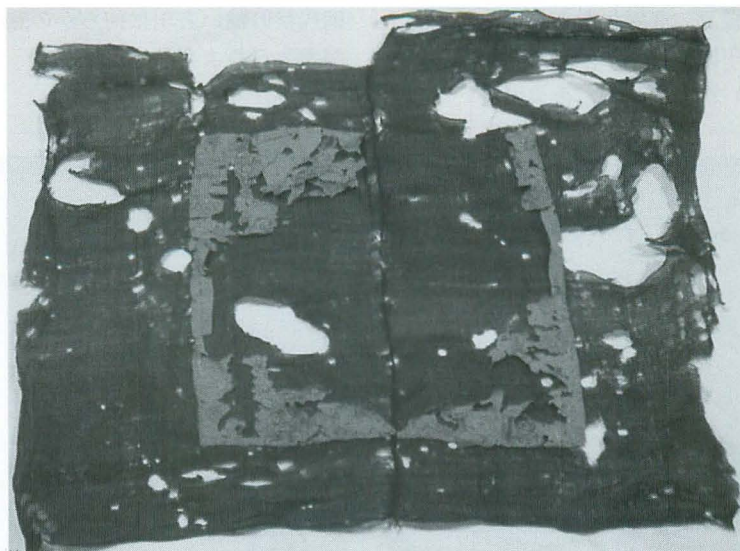
網代状の繡い表現に何らかの意味があった、などが考えられよう。



伊是名島 名嘉家伝世「刺繍大袖衣」前面 <現状> 写真8



背面 写真9 撮影／寺田貴子（2008年1月）



伊是名島 名嘉家伝世「掛け袱紗様刺繍裂残欠」〈現状〉写真10

刺繍の特徴

名嘉家に伝世する刺繍御衣とは、第2尚氏の初代琉球王・尚円王（在位1470～1476年）が伊是名島に住む姉「伊平屋阿母加那志」に贈ったもので、国王の謁見など特別な行事の際に着用したものとされている。「伊平屋阿母加那志」とは特別な神職の名称で、名嘉氏はその末裔である。

絹の縞子地の刺繍御衣には、鳳凰や植物、州浜などの文様が衣装全体に大きく配置され、刺繍糸は絹で、目視観察では7色（青濃淡、黄濃淡、緑、白、黒）の色糸が平・あるいは極甘燃りで用いられ、下絵の墨線は明瞭に描かれている。

刺繍の特徴としては、「琉球千鳥繡」が主要な技法で、その他に鎖繡、まつい繡、平繡、押さえ繡などが部分的に用いられている。

掛け袱紗様の裂は、方形の黒地の芭蕉布上に刺繍布が縫い付けられたもので、刺繍部分は完全な形状ではなく、断片として残っている。刺繍技法として特徴的なことに「肉入れ繡」があげられ、本品で用いられている「肉」の素材は、一般的な日本刺繍で用いられる綿や紙縫り、金糸などとは異なる材質であった。

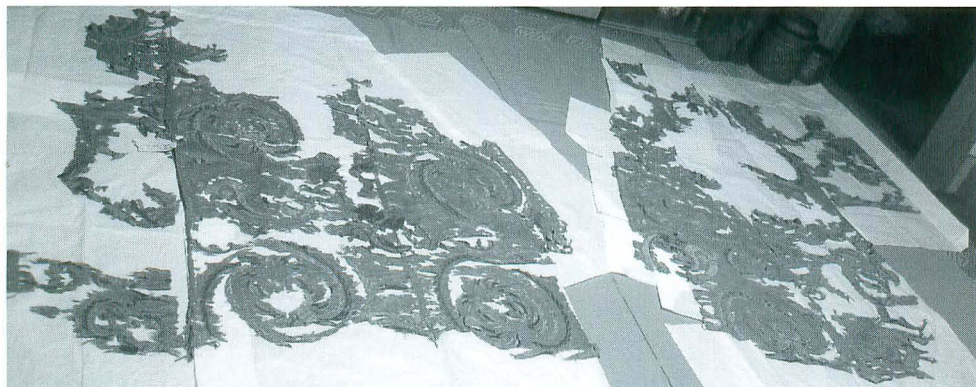
なお、2007年秋に沖縄県立博物館新館が開館するにあたって、伊是名村の名嘉永和氏所有「伊平屋阿母加那志拝領品の刺繍御衣」や沖縄県立博物

館所蔵の「伊平屋阿母加那志刺繍裂」および歴史的文献資料に基づき、総合展示「神女制度のしくみ」コーナーにおいて王国時代の神女の姿が紹介されることとなり、刺繍については寺田貴子が、縫製については植木ちか子が担当した。



撮影／植木ちか子（2007年11月）写真11.12

沖永良部島 森家伝世「刺繍大袖衣」〈現状〉



撮影／寺田貴子（2009年4月30日）写真13

〈文様〉



動物文 鳳凰① 写真14

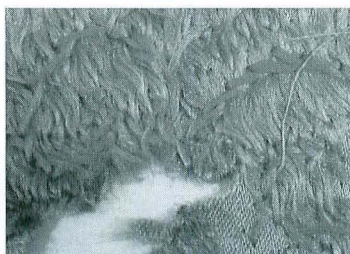


動物文 鳳凰② 写真15

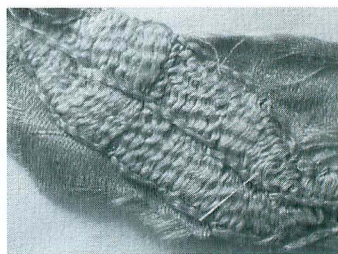
〈技法〉



動物文 鳳凰① 写真16



② まつい繡い 写真17



③ 繡いきり 写真18



④ とじ押さえ 写真19

刺繍の特徴

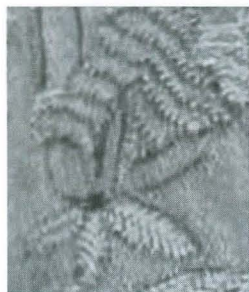
- ・直径が50cm近い鳳凰文様が大胆に配置されている。
- ・その文様を主体として、周りに吉祥文様が配置されている。
- ・繡い技法には「琉球千鳥繡い」が多用されている。

久米島 屋慶名家伝世「あしあげこむね」〈現状〉

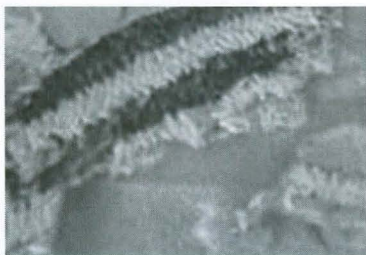


前面 撮影／寺田貴子（2007年12月） 写真20

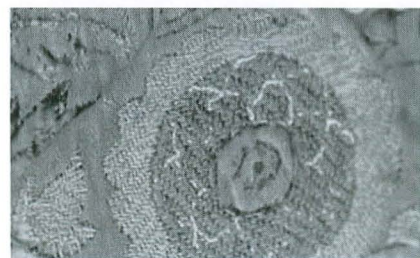
〈技法〉



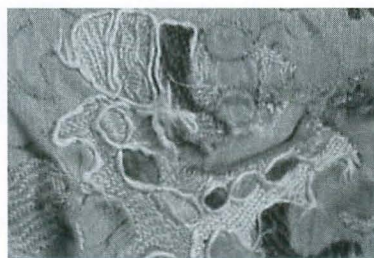
① 琉球千鳥繡い 写真21.22



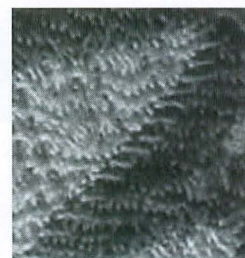
② 本綾織り繡い 写真23



③ 押さえ繡い 写真24



④ 駒取り繡い 写真25



⑤ 毛がけ 写真26

刺繍の特徴

- ・刺繍は衣装全体ではなく、袖口や胸元など部分的に用いられている。
- ・きわめて高度で、緻密な刺繍技法を用いている。
- ・大袖衣装に直接刺繍したのではなく、あらかじめ別の布地に刺繍を行い、それを「きりばめ」、「アップリケ」などのように綴じ付けている。

久米島博物館所蔵「刺繍神衣裳」〈現状〉



前面 写真27

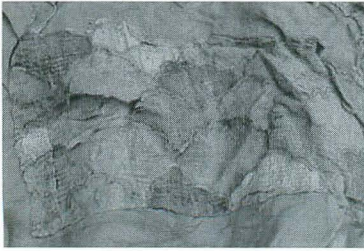


背面 写真28 撮影／寺田貴子（2007年12月）

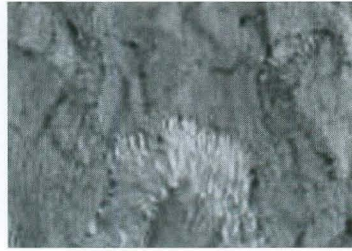


袖口部分 写真29

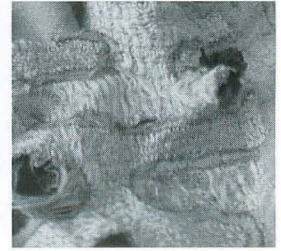
<技法>



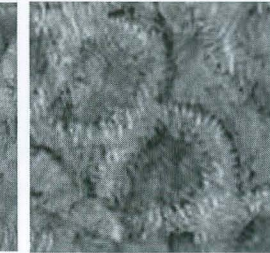
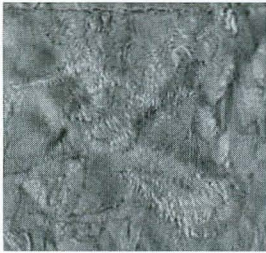
青海波文 写真30



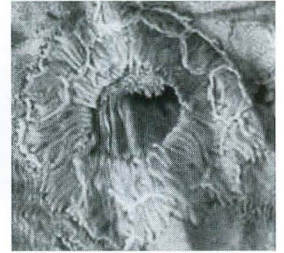
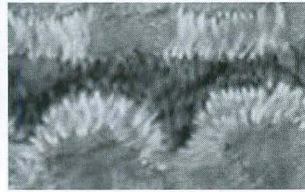
雲文 写真31



工霞文 写真32



琉球千鳥繡い 写真33. 34. 35



押さえ繡い 写真36

刺繡の特徴

- ・刺繡は衣装全体ではなく、袖口や胸元など部分的に用いられている。
- ・前者（あしあげこむね）と比較して刺繡技術の完成度は劣る。
- ・大袖衣装に直接刺繡したのではなく、あらかじめ別の布地に刺繡を行い、それを「きりばめ」、「アップリケ」などのように綴じ付けている。

以上文責：寺田

琉球文化圏にのこる古刺繡の生地について

現在、われわれが確認した資料は、伊是名島名嘉家「伊平屋阿母加那志拝領品の刺繡御衣」「掛け袱紗様刺繡残欠」と沖縄県立博物館・美術館所蔵の「伊平屋阿母加那志刺繡裂」、沖永良部島森家「刺繡大袖衣」、久米島屋慶名家「あしあげこむね」、久米島博物館所蔵の「刺繡神衣裳」、本部町嘉津宇の仲村家「刺繡大袖衣」、「鳳凰文様刺繡残闕」「カイチ様文様刺繡残闕」である。さらに、古刺繡ではないが、那覇市歴史博物館所蔵の国宝「絹白地竹蝙蝠文様牡丹刺繡衣裳」である。

これらの生地については、仲村家の刺繡大袖衣が経緯糸とも絹糸単糸の平織、那覇市の刺繡衣裳は絹一越縮緬生地であった。両者の時代はずいぶ

んと隔たりがある。仲村家の刺繡生地について以下説明する。分光色測計CM-700dで計測した。対使用物の色は均一ではないので、二カ所計測したのものもある。

仲村家の刺繡大袖衣について、『沖縄県国頭郡志』には以下のように説明がなされている。

◎本部村嘉津宇仲村渠氏、屋号ユレ屋(同家永年村屋なりしを以て此名あり)

同家にも前記並里家の如く上座に按司位牌二個を祀り霊前床下に古櫃一個ありて左の遺物を納めたり。

- 一、絹の琉服一着(水色の七子地に花模様の古刺繡あり)
- 一、八巻用サージ二筋(金欄にして梅花の小紋模様あり長各一尋)
- 一、布片二種(水色絹地及黄色地に孔雀、鳳凰等の巧妙なる古刺繡あり)

同家の口碑に依れば阿応理恵按司の礼服なりしという。又北山滅亡の際貴族此家に隠遁して世をさけたりとも云ふ。然るに右遺品の保存せらるゝ外何等の記録なく従って其人物の当家との関係及墳墓等全く不明にして五里霧中に葬らるゝのみ、

今回よく資料を観察すると、七子、あるいは魚

子織という二本以上の糸を引き揃えて織られた平織組織ではなかった。水色地ではなく、現在は退色して黄色と青色のぼかし緋と黄色の地糸を組み合わせて平織をした縮切緋に近い意匠構成である。

繊維素材は絹で、単糸をゆるくZ撚りしたものを段染した経緋(L47.64,a2.09,b20.82)を青色4本に対して16本の黄褐色(L53.39,a7.06,b27.70)のZ撚り双糸の地糸を組み合わせた経糸に、両耳は黄色2本藍色2本そして黄色と片羽である。一見して黄色と青色が補色となり、絹糸の光沢をさらに際立たせる意匠効果を意識したものである。この技法の資料については、室町時代以降にみられると小笠原は報告^(註4)している。緋技法の伝播は沖縄から九州本土へと伝わったとされる定説について、より詳しい緋技法の伝播の解明につながる重要な資料であることは間違いない。太子間道や法隆寺裂に見られる緋などはすでに78世紀には現物資料があり、経巻紐の織や組紐そして平緒にも染め分けの段模様が見受けられる。室町時代には縮切緋衣裳が現れる。ある職能集団が大和より技術を伝えたと推論できないことはない。沖縄の緋の特徴は、白地や紺地にある緋模様を表すという特徴であり、その技法は八重山ミンサーや首里の手縞や綾中に見られる真芯(ましん・まーしん)や、織りながら緯糸をずらして模様を作るずらし緋技法である。本資料の縮切緋があるということは、沖縄の緋の技術経路や伝播をどのように考えれば良いのか、たいへん貴重なそして重要な資料であることを物語っている。今後さらなる研究が必要である。

一、八巻用サージ二筋(金欄にして梅花の小紋模様あり長各一尋)

現在はサージ一筋のみ保管されている。金欄というのは、箔糸のみで文様を織り出した織金と小笠原は解説している。さらに(注)平地、三枚綾地、縹子地に絵緯(えぬき、または紋緯)として紋様を織り出したものをいい、織造期は宋代とされ、明代中期以降華やかな金欄が多く見られると解説している。梅花とは、芯の○と花卉の○が五つなので、合計六になり、国頭郡志のこの説明も間違っている。七つ星については日、月、火、水、木、

金、土、の七曜の「七曜紋」・七曜は北斗七星を象ったものなので、「北斗星紋」とも言われ、中国の天文学では、(光る意)をさし、時をはかる指針とされている。仏教ではそれぞれ食糧・巨門・禄存・文曲・兼貞・武曲・破軍とし、さらに菩薩の七菩薩(日輪・月輪・光月輪・増長・存怙・地藏・金剛手)にあて、これらの星の来臨を請い、不老長寿と幸福を祈る。妙見信仰から興った紋であるという。(注)

本資料は平織地に絹黄褐色地(L48.31,a4.60,b25.66)に薄黄褐色、水色、青色糸を緯紋織したものである。七つの○を18パターン布幅に配している。金箔糸を使っているものではないので金欄とは呼べないが、きらびやかな織布を見てそう呼んだのであろう。後の歴代宝案には織金としたものが多数見受けられ、織金と呼ぶのが妥当だろう。

一、布片二種(水色絹地及黄色地に孔雀、鳳凰等の巧妙なる古刺繍あり)

写真3と写真6を指している。水色絹地及黄色地に孔雀、鳳凰等とあるが、どちらも黄緑地(L49.61,a-0.76,b10.39)の五枚縹子地である。ひとつは孔雀ではなく、向かい合う鳳凰文様である。この資料をよく観察すると金箔の付いた太めの絹糸であった。金糸といっても、金を細く延ばしたものを平たくしたもの(箔糸)、さらにこれを平たくしたものを糸に巻き付けたもの(撚糸)、紙に金箔を貼ったものを細く切って緯糸としたもの、さらにこれを糸に巻き付けたものなど様々にある。写真3,6に付着した布は赤色(L33.97,a33.83,b14.61)で、木綿単糸S撚り平織、経糸密度20緯糸密度20/cm、10ヨミであった。染料の特定については検査途中である。

写真6の文様について、寺田はカイチ様としている。カイチとは頭に一つ角がある一角獣である。正義や公平を象徴する祥獣である。

名嘉家・森家とも現在の刺繍縹子生地は金茶色をしている。測定すると表2のようになった。仲村家の刺繍縹子生地は緑味のある黄色をしている。

本品は沖縄にある以上、沖縄県の重要文化財に

指定すべき貴重な資料の一つであることは間違いない。日本国としないのは、沖縄県内に変わらず残すべき資料であるためである。

用途および形態

刺繍残欠は打敷とみるべきか、掛け袱紗とみるべきか。名嘉家(写真9)、仲村家とも方形の布が残されている。前者は大袖衣を包む風呂敷として、後者は残欠のため用途はわからないが大袖衣とともに残されている。辻合・橋本は「官服の胸部に用いられたのではないか」とある。与那嶺・山田は「美辻・御辻と呼ばれる器物等への覆い布と考えられる。」としている。名嘉家の「芭蕉紺地布(中・絹黄色地花紋様刺繍裂)」の寸法は縦54.0cm、横66.0cm、中部分は縦33.0cm、横36.0cmとあり、縁布がある。

一方仲村家の刺繍は、カイチ様文様残欠(写真6)をよく観察すると、同じカイチの尾のような形が上部に墨描きされているのが確認できた。もう一点の刺繍残欠について観察すると、向かい合う鳳

凰が刺繍で表されているが、この残欠の縁が一定の円を描いて切り取られている。(写真3)を参照。寺田の指摘で顕微鏡を使って詳しく観察すると、絹糸のところどころに金箔を施した痕跡が観察できた。金箔を施したとしないのは、金色の光沢が鈍くなり、輝きがなくなる。金糸には、金箔を和紙に貼り付け細く切って糸としたものや、絹糸に巻き付けたものなどがある。この資料は絹糸に直に金箔を貼り付けたもので、日本や沖縄の染織史を解明する上で、重要な資料であることは間違いない。これに似た意匠の刺繍(写真28)が久米島博物館に所蔵されている。今後、さらに比較検討していきたい。

織物組織について

伊是名島名嘉家刺繍大袖衣(注3)、沖永良部島森家刺繍大袖衣、本部町嘉津宇仲村家「カイチ様文様刺繍裂残欠」をそれぞれの生地について調べた。今回調査した刺繍生地はいずれも無紋経五枚縺子であった。

表2 資料の織物組織

	名 嘉 家	森 家	仲 村 家
素材	絹	絹	絹
織物組織	五枚縺子	五枚縺子	五枚縺子
経糸密度/cm	100本	112本	110本
糸の撚り	S撚り	S撚り	S撚り
緯糸打込み密度	40本	40本	35本
糸の撚り	ゆるいS撚り	ゆるいS撚り	Z撚り
色	経緯糸ともに金茶色 L50.65,a11.51,b35.64 L57.79,a7.58,b32.02	経緯糸ともに金茶色 L53.87,a10.88,b40.55 L54.66,a10.10,b39.95	経糸：黄緑 緯糸：黄色
刺繍下描き ^(注4)	墨	墨	墨

縺子織とは、シリアのダマスカスに起源を持ち、中国宋代(960~1279年)に織り出された織物組織の総称である。日本へは14世紀末に織物が入り、16世紀末には生産された。

写真をみると、カイチ様文様の残欠のうち、刺繍された文様が反復されていることに気がついた。布幅は片織り耳を使用し折り返し0.8cmで幅10cm、

左の折り返しは裁ち耳使いでやはり0.8cmである。つながっている布の丈は55cmである。これは旗か或いは祭礼荘厳典の飾り掛布ではないかと植木は推察する。

おわりに

今後、これら琉球文化圏にのこる刺繍資料を比

較検討することによって、沖縄で刺繍をしていたのか、どのような特徴があったのかなどさらに明らかにしていきたい。

なお、「沖縄に伝世されている」としたのは、沖永良部島は琉球文化圏に含まれ、森家に伝わる刺繍衣裳残欠は仲村家や伊是名島名嘉家の資料と非常によく似ており、今後の沖縄の刺繍を研究する上で、比較検討すべきものであるため紹介した。

三十数年も沖縄や奄美に残る服飾品の調査を続け、所有者との信頼関係を築いてきた植木ちか子のおかげで、筆者（片岡）と寺田が調査に加わり、所有者に少なからず、それらの資料についての説明の機会を得ることができた。この報告はあくまでもわれわれの共同研究の第一歩であり、今後さらに調査研究を進めていく。

戦後、紅型を復興された城間栄喜氏は日本の人間国宝認定を固辞したと聞く。琉球王府の伝統を絶やさないためである。これらも言うまでもなく次の世までも沖縄に残さなければならないかけがえない文化財である。

謝辞

本研究を発表するにあたり、現地調査の共同研

究者である植木ちか子、その刺繍衣裳の復元の指揮を執った寺田貴子および刺繍をしていたただいた皆さん、そして所有者の仲村正利氏はじめ名嘉永和氏、森晃氏、屋慶名松助氏（故人）、久米島博物館（旧久米島自然文化センター）関係諸氏の全面的な協力と理解で実現した。心から感謝申し上げます。なお、本研究の一部は日本学術振興会の科学研究費補助金(基盤研究B 22320038)の助成を受けた。

以上文責 片岡

注1 国際服飾学会誌 3号 p38～42 1の86

注2 新星図書出版 1982

注3 日本の美術9 No.220 金網 p27

注4 P381 大正八年発行 国頭郡教育会編纂

注5 「伊是名村名嘉家の旧蔵品の解説書 —伊是名の阿母加那志の衣装・諸道具—」伊是名村教育委員会刊には絹黄色地花鳥紋様衣装とある。

注6 p37 「緋」日本の美術2 No.309 小笠原小枝著 至文堂 1992

p112 「緋KASURI」長崎巖著 小学館1993

注7 那覇市歴史博物館所蔵の白地竹蝙蝠牡丹文様型染刺繍縮緬衣裳の刺繍下絵は朱で描かれていた。